

『精神科ならではのファーストエイド  
搬送時サマリー実例付』

# 苦しみの 主観的体験への道標に

著：中村創・三上剛人／定価：本体 2,400 円＋税  
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



本書を開くと、凄まじい自傷行為の再現場面がありありと迫ってきます。精神科とか急変時の看護実践という視点で眺めると、危機的状況におかれた患者さんの身体的安全を、どう取り扱うのが最善なのかという実践的方法論がていねいに説明されています。現場の看護師には、お守り代わりの一冊となるでしょう。

さて、看護教育という視点で眺めた場合は、著者が「患者さんの心に向けてどう声かけし対応するかが決定的に大事」と述べているように、自傷や自殺企図をせざるを得ない主観的体験に、思いをはせられるようなところの醸成に主題があるように見えます。

教員は自傷や自殺企図という行動自体ではなく、患者さんがそう行動せざるを得なかった体験に向かえるよう、学生に道標を示すことが求められます。そのため私は学生に「自傷しないと、こちらの安定が保てない苦しみは想像つきますか？人生に対する絶望とその呻き声が聞こえますか？（少なくとも私には難しい）」と、問いかけます。しかし、学生を苦しみの体験に導くことはとても困難で、言葉だけが上滑りしやすい。

著者は「精神科での看護経験がある人ならば、（中略）そうせざるを得ない理由があったのだろうと容易に理解することができると思います」と、言っています。学生は、実体験がないからわから

ないのです。「看護のこころが発展中の学生に、病を抱えた人間の苦悩や苦しみをどうやって伝えるのか？」という難しさです。

今までの教科書は、「自傷したときの気持ちを受け止める」などと記述されていました。しかし、学生は知識として理解できたとしても、実体験として知っていないため、自傷行為に至るころがどれだけ凄まじい状況か、想像が追いつきません。

そうしたとき、画像付きのリアルな状況が見られる本書があれば、疑似実体験として、学生はその心情に思いをはせることが可能になります。そのとき教員から「そうせざるを得ないところが、想像できますか？」と、問いかけがあれば、学生はどれだけ願っていても、患者と同じ苦しみの地平に立つことは難しいと気づけます。大切なことは、相手の気持ちは完全にはわからないという気づきです。その気づきは、不全感に苦しみながらも努力しつづける信念につながります。その苦悩と忍耐が、患者-看護師関係から、限界を抱えた真の人間同士の出会いを開くのです。そこがこの本書の潜在能力として、今までの本と圧倒的に違うところだと思います。そのとき、強者（ケア者）-弱者（患者）の一方通行の関係から、限界と弱さを抱えた人間同士の相互的な関係性のなかに在ることが培われていくことでしょう。